

ドイツの教科書にみる近代日本像の変遷

上野 隆生*

Changing Image of Modern Japan in German Textbooks

Takao UENO

After the Meiji Restoration, Preußische Germany presented many “models” to the newly established Japanese government: the constitution, laws, political institutions, military systems, school systems, and so forth. In that sense, Germany exerted a deep influence upon modern Japan. Accordingly, the relationship between Japan and Germany was very close, at least from Japan's point of view. But could the same thing be said from the German viewpoint? What kind of images did Germans hold of modern Japan? In this article the image of modern Japan in German school textbooks of geography, published from the late 19th century to the 1930s, will be surveyed.

Although the quantity of information on Japan was restricted in the 19th century, textbooks described the national character of the Japanese people rather in the positive, espe-

*うえの・たかお：敬愛大学国際学部助教授 近代日本外交思想史
Associate Professor of Modern Japanese History, Faculty of International Studies,
Keiai University; history of ideas in Japanese diplomacy.

cially in comparison with that of Chinese. This was partly because Japan had started studying things European and adopting them, and partly because the Japanese appeared to be clean, clever, creative, and peaceful. After the turn of the century, German textbooks were filled with descriptions that showed surprise at the rapidity of Japan's development, politically as well as economically. Along with European models, specifically German models, Japan had become one of the great powers in the world within a short period. That was really astonishing to the Germans. After the Sino-Japanese and the Russo-Japanese wars, it was often described that Japan had become a colonial empire and had successfully taken the ruling position in the Far East.

At the outset of World War I, Japan declared war on Germany for the purpose of acquiring *Schantung* and realized its aim. In the 1920s the unbelievable rapidity of Japan's development caused not only surprise but also anxiety. Textbooks began to wonder what Japan really desired to grasp and in which area Japan sought to expand its influence. The reason why Japan could successfully achieve industrialization to become a great power was at this moment one of the central themes of description. They pointed out the overflowing population in the "small island" and industrialization itself, which had caused a concentration population in urban areas, as the main reason. In addition to that, some textbooks showed geopolitical interests and made geo-political analyses in the late 1920s. This tendency continued increasingly through the 1930s, and the peaceful image of the Japanese people in the 19th century was gradually transformed into a quite different one, namely an image of the Japanese as always prepared for war, overcoming their hesitation.

はじめに

近年の通信・輸送手段の発達には目を見張るものがある。そのため、時間的・空間的に世界はますます狭くなっているといえよう。日本に関する情報が世界各地で伝えられる頻度が増しているのも、単に円が強いか否か

だけではないだろう。たとえば、最近のドイツの新聞をみると、日本の財務当局が銀行業務に関する規制を緩和して、銀行業務を簡素化する一步を踏み出したことを伝える記事⁽¹⁾と並んで、三宅島噴火の様子を大きく写真入りで報じている⁽²⁾。この件については有力紙のみならず、地方紙でも三宅島の噴火はやはり写真入りで報じられている⁽³⁾。さらに、2000年9月1日に東京で行われた防災訓練の様子が写真入りで報じられている⁽⁴⁾。これらは、アジアの事象も同時的に認識されていると同時に、火山の噴火や地震といった自然現象への関心が伏在している一例と考えられよう。

さかのぼると、日本とドイツとは過去1世紀以上にわたって深い関係がある。明治維新後の政府がさまざまな法制度や政治思想、科学技術や文学から軍事に至るまで、積極的に受容を試み、また人や文物の交流を通して大きな影響を受けたことは周知の通りである⁽⁵⁾。それでは、ドイツの側でも日本に対する関心が同時代的に、さらには継続してそのような関心が存在していたのであろうか。この点を包括的に分析するためには広汎な素材が必要となるのは言うまでもない。本稿は、そのための一種の予備的考察を行うことが目的である。ここで取り上げるのは、19世紀後半からアジア・太平洋戦争までの時期の教科書を中心とした教育関連書である。なかでも地理の教科書を主な対象として、日本に関してどのような叙述がなされているのかを論じていくことにしたい。時期をこのように限定したのは、明治維新後の近代日本に焦点を合わせるためである（この後の時期、つまり戦後の日本の記述については、稿を改めて検討する予定である）。また、地理関係の教科書を主として取り上げるのは、同時代の世界像——その中に日本像も当然含まれる——が記述されている可能性が高いことが第一の理由である。第二の理由としては、特に19世紀末から20世紀初頭にかけて地理と歴史との有機的な結合を求める声が教育関係者からも指摘されているほか⁽⁶⁾、地理学を一種の総合科学として位置づけようとする風潮も見受けられるからである⁽⁷⁾。

なお、ドイツの学校制度は日本のそれとは大きく異なっているうえ、地方ごとの独自性も強い。そのため、より精緻な分析には、学校制度上同一

レベルの教科書を各地方ごとに検討する必要がある。また、通時的に検討するためには、各時代における学校制度の変遷についても十分な検討を済ませておかねばなるまい。しかしながら、これらをあえて今後の課題として、本稿においては、19世紀後半から20世紀前半の時期の地理教科書の中から、中等教育レベルのものを中心に、いくつかを標本抽出的に取り出して検討することにする。それによって、粗雑ながらもこの1世紀近い時期について、日本がドイツの教育関連書においてどのように描かれていたのかを文字通り素描してみたい。以下叙述の順序としては、19世紀後半期からほぼ時系列的に日本関連の記述を検討していくことにする。

1. 19世紀の日本の記述

19世紀において日本はどの程度、またどのように描かれていたのだろうか。

条約改正後の日本はそれなりに欧米諸国に認知されたと考えられるかもしれない。なかんずく、法制度や国家学の多くを取り入れたドイツにおいてはなお一層その傾向が強いと思いたくなる。しかしながら、その認知度は必ずしも高いとは言いがたい。たとえば、19世紀末の市民学校教員の候補者向けに論述試験のテーマを掲げた一種の試験対策書においては、地理で114項目、歴史で109項目のテーマを掲げている。歴史においては、古代オリエント・エジプト・インドは合わせて6項目、さらに歴史的事象の舞台としての北アフリカが1項目掲げられている。また、地理においては、西アジアやエジプトなどのオリエントの自然と住民（第81項）、モンゴル系民族の伝播と文化（第79項）、イスラムの地理的伝播（第78項）、ドイツ帝国の植民地領（第102項）、アフリカ・アメリカ・アジア一般（第73～75項）のほか、いくつかの比較項目が挙げられている。すなわち、南米とアフリカ（第64項）、南米の熱帯地域とアフリカの熱帯地域（第65項）、アフリカとオーストラリア（第66項）、南米とオーストラリア（第67項）、イタリアとインド（第68項）、ピレネー半島とアラビア半島（第69項）、などが挙げられて

いる。しかし、その中に日本はおろか、中国を含む東アジアは独立項目として掲げられてはいないのである⁽⁸⁾。

それでは、19世紀の地理教科書に日本はどの程度記述されていたのであろうか。いくつかの教科書にそれを探ってみよう。まず、19世紀末から20世紀初頭にかけての比較対象が可能な教科書として、1895年版のズパンの『ドイツ学校地理』を取り上げてみよう。本書全238ページのうち、日本関連の事項は第214項の「日本」(計2ページ)と「交通地理」の中に散見される。「交通地理」における日本の記述は、鉄道が世界的に発達しつつあるが、ジャワや日本はその例外であるという件や、サンフランシスコから横浜への郵便船航路が存在していることなどが述べられている⁽⁹⁾。

日本自体の項目における記述としては、地勢・気候のほか極めて簡単なが支配体制や社会経済に関する指摘も見受けられる。すなわち、イタリアや中国・朝鮮とほぼ同緯度にありながら、イタリアよりは冷涼で中国・朝鮮よりは温暖であることが述べられ、その理由として「温暖な海風によって全土がなでられている」との指摘がある⁽¹⁰⁾。さらに、日本人はモンゴル人種で中国文明に源を発し、日本の言語が多音節言語である点も指摘されているが、中国との対比においては次のように注目すべき叙述がある。

日本人の国民性は総じて多くの良い面を呈している。異国のものすべてを軽蔑する中国人のうぬぼれ心の代わりに、日本人はヨーロッパの見解や風習、及びヨーロッパが生み出したものを受け入れている。また、中国人の不潔さに代わって、日本人は最大の清潔さを示している⁽¹¹⁾。

そのうえで、現在の皇帝(「ミカド」)が1867年に高級貴族の権力を打破して、ヨーロッパ流の帝国を作り上げたことを述べている。前述の「交通地理」項目の叙述とは若干矛盾する趣があるが、電信や鉄道は全土にいきわたっている、としている。教育制度については、小中学校・高等学校・大学が設立されていて、ヨーロッパ人教員が一部ではなお働いていると述べている。このようにヨーロッパに倣ったさまざまな制度が取り入れられていることを簡潔に叙述しているのだが、宗教のみについては、仏教または

古代の太陽神信仰に日本国民は固執している、と記している。産業に関しても、農耕が勤勉な住民の最高の職業で、米が主食となっており、茶や絹などが主要輸出品であること、石炭を始めとして鉄や銅の産出に富んでいること、産業では日本は他の全アジア諸国に勝り、ヨーロッパに倣った機械工場が導入されていること、などの記述がある。産業で日本がアジア諸国に勝っているのは、有名な漆器の生産によるためとしている。主要な都市として挙げられているのは、「百万都市」の東京、「古代首都」の京都、「港湾都市」の大阪や長崎である。大阪は第二の工業中心地、長崎は中国との貿易地という説明が付け加えられている⁽¹²⁾。

如上の記述はこれ以前にもみられる。オーストリアの中間学校向けに書かれた同じくズパンの『地理教科書』(1886年)をみてみよう⁽¹³⁾。ここでは「交通地理」の項目はなく、世界の人種を分類した表の中にモンゴル人種の系列として「日本人と朝鮮人」⁽¹⁴⁾が挙げられているほか、わずか1ページにも満たないものの、独立項目で日本に関する記述が存在する。1895年版と比較して大きな内容の相異は認められない。本書で注の部分に補足的に記述されている内容が、1895年版では本文に移行されているのが目立つ。そのほかには、台風・岩礁や浅瀬の存在などの自然現象のために日本が外界から閉ざされていて、そのため日本人が外の世界とは分離したがる欲求が高まった点に触れている。また、農耕が盛んであるという記述は1895年版でもみられるが、それが太平洋の穏やかで健康的な気候とともに、住民である日本人の疲れを知らぬ勤勉さとも関連しているという指摘がある⁽¹⁵⁾。

これらの記述に共通しているのは、自然環境と人々の生活との関連を念頭においている点である。換言すれば、少ない情報量ではあっても、自然環境と人々の生活とを有機的に叙述しようという方向性がうかがわれる。

では、ズパン以前の教科書では日本のことがどのように描かれているのだろうか。さらにさかのぼって1870年代に出されたものをいくつかみてみよう。

1874年版のザイドリッツの『学校地理：地理の授業のための手引書 拡大改訂版』⁽¹⁶⁾では、全336ページ中「日本帝国」の記述は東アジアの中の

1 ページのみである。だが、その内容はズバンの教科書と重複するものがある。すなわち、緯度上の位置や気候が健康に良い点などを述べ、絹や茶の生産に富むとともにこれらが重要な輸出品となっていることにも触れている。他の産業としては、漆器・陶器・金属品・指物細工などがあり、熟練性は中国に劣らないものがあるとしている。そして、国民性について、「力強く非常に活動的な民族」と述べている。宗教に関しては、16世紀にフランシスコ・ザビエルがキリスト教を伝え、同世紀末までに約100万人の信者がいたと考えられるが、日本人の外国人嫌いと権力者の意向によって根絶された、とある。やや事実誤認が認められるのは、1854年にアメリカに対して長崎・箱館・横浜の各港を開いたという件であろう。下田と箱館であるのはいうまでもない。だが、これは全体の叙述からすれば些細な点である。むしろ、それ以前には中国とオランダとのみ交流し、アメリカへの開港以後各国にも港を開くようになり、世界の交通の中に日本も入っていったという記述が重要であろう。ドイツとの関係については、1861年にプロイセン及びドイツ関税同盟と「貿易協定」（正確には修好通商航海条約）を締結したことも述べられている。さらに、4つの大きな島からなっていることを述べた後、琉球が1872年に日本に帰属したとしているが、この部分は正確ではない⁽¹⁷⁾。

また、同じ年に出されたシュトルテ著『地理の授業の学習練習』では、米と茶が輸出されていること、かつてはヨーロッパ人の立ち入りを禁じていたが、現在ではすべての港が開かれていること、「風俗や服装は我々のそれとは大きく異なっている」こと、「国民は一般的に教養があるが異教徒である」こと、などを掲げた後、「多くの若者が教育のために欧米に派遣され、欧米の設備や制度（鉄道・電信・学校）がますます受け入れられている」と結んでいる⁽¹⁸⁾。

さらに、シャハツの『地理学教科書』（1874年）は1,164ページに及ぶ大部な書であるが、日本の記述はわずか3ページほどである⁽¹⁹⁾。地誌や自然環境・気候などの記述の後、銅・漆器・陶器・茶などの産物が豊富であることや仏教・儒教・神道などの宗教に関する叙述が続く。幕藩体制下の

政治制度についても簡略に記述されている。そして、1854年以後、外国との交流が始まり、大きく変わったとして、将軍権力が消滅し、「ミカド」が権力を掌握したとしている。その後の変容については、次のように述べている。

この時以後ヨーロッパの手本を熱心に見倣った改革の動きが展開した。その動きは正当な驚きを呼び起こした。日本の若者が高等教育を受けるためにヨーロッパにやってきた⁽²⁰⁾。

その結果、鉄道・電信・汽船がヨーロッパの見本に倣ってつくられた。「多くの学校では英語・ドイツ語・フランス語・医学・科学技術が（一部はすでに日本人教師によって）ヨーロッパのとりわけドイツの、日本語に訳された教科書にしたがって学習された。」そして日本の国民性については、中国人と比べて多くの快い側面を有している。日本人は、異国のものすべてを軽蔑する中国人のような傲慢な誇りを持たず、大半の他のアジア人よりも高度な文明段階にある。勇敢で毅然としており、秩序や清潔さ、親切さ、の感覚を多く持っている。また、正義を愛する心も強く、ハラキリというなるほど残酷ではある習慣も彼らの発達した名誉心を示している⁽²¹⁾

と述べ、主な都市についての説明が最後になされている。

このようにみえてくると、ズパンの1895年版の叙述は、それ以前の叙述を踏襲あるいは引き写したのともいえよう。もっとも、叙述の質量は各著書によってかなり異なっている。また、1880年代に出されたものが、必ずしもそれ以前のものよりも豊富な叙述をしているというわけではない。たとえば、ギムナージウム初等段階向けに書かれたアレンツの『最初の地理学授業用手引』（1880年）では、337ページのうちわずかに1ページ半が日本の叙述にあてられているだけである⁽²²⁾。その内容も上に紹介したザイドリッツやシャハツの内容を祖述しているところが目立つ。すなわち、きわめて簡略に火山が多いなどの地勢・気候を述べ、

日本人は多くの点で中国人と似ているところがあり、ほとんど全く同様の食物生産に従事している。しかし日本人は産業の多くの分野で中

国よりもはるかに進んでおり、たとえば、時計、蒸気機械、望遠鏡など、ヨーロッパの巧みな製品を模倣している。精神教養の点でもまた、中国人をとうの昔に追い越しており、ヨーロッパの偉大な学問業績を翻訳を通して自らのものとしている⁽²³⁾

と記し、「最近すべての封建領主が廃され」たこと、「1854年以来日本は諸外国との交通を開いた」ことなどにも触れている⁽²⁴⁾。

また、ギムナジウム向けに書かれたイエニケ『地理教科書』（1884年）では本文226ページに銅板画も6ページほど添えられているが、日本の記述はわずかに1ページに過ぎない。しかも、完全な自然地理の叙述に終始している⁽²⁵⁾。同じくギムナジウム用のクライン『地理教科書』（1885年）でも全363ページ中日本の記述はわずか1ページにも満たない⁽²⁶⁾。そこには銅板画で「東京市民のタイプ」と題された鬚姿の町人の胸像が描かれている。「その地理的位置のために日本は孤立させられている」という件にもみられるように、ここでも、自然地理的叙述がほとんどを占めている。「外国貿易のために若干の港が開かれているが、国内はいまだに外国人に対しては全般的に閉じられている」という叙述や、

四つの大きな島と数え切れない小さな島とからなる日本帝国は、住民の教養と性格、そしてまた先入観なしにヨーロッパ文化の数えきれない成果を取り入れたことによって、アジアの独立国の中でも第一位に位置している

という叙述がわずかに社会経済に関する部分である。また、このような叙述とともに、「日本人は、アイヌの一枝族が移住して文化的に向上したものだと思われる。アイヌのわずかな一部は、今日でもなおエゾとクリル諸島での半自然状態の中で生活している」という人種起源論的な記述もみられる⁽²⁷⁾。

本節の初めでみたズパンの教科書が出された1890年代についても、その他のものをいくつか取り上げてみたい。まず、後に登場するダニエルの著した『地理の授業用手引』（1891年版全192ページ、1894年版全270ページ）をみてみよう⁽²⁸⁾。両者の日本関連記述はいずれも同文で1ページに満たな

い。地勢・気候などの簡単な記述のほか、中国同様に米・茶・絹を産出することを述べ、主要都市の紹介がなされている。本書の中の、

かつて日本人は中国人とのみ交流していた。日本人は中国人とは親戚で、中国人から書を学んだが、中国人よりもはるかに清潔で賢明である。それゆえに、日本は最近好んでヨーロッパ人を教師に選んでいる。そのヨーロッパ人教師らから短い年限のうちに日本は実に多くを学んだのである⁽²⁹⁾

という件がわずかに人文地理的叙述といえよう。

そして、ギムナージウムの中級学年用に書かれたピュッツの『比較地理手引』（1895年）では328ページ中1ページ弱が日本の記述に当てられている⁽³⁰⁾。地勢・気候の叙述が大半だが、仏教が支配的な宗教であること、中国同様最近まで外国との交流が閉ざされていたことなどを記し、

まず1854年に、いくつかの港が諸外国に開かれた。それに続いて1868年の政治的大変動が起き、それによって、精神的リーダーであるミカドが世俗の支配権をも再び手に入れたのである。それ以後、日本国内では、ヨーロッパの教養を取り入れようという、注目すべき熱意が示されている⁽³¹⁾

と述べている。また、クライン『地理教科書』の1898年版は、前掲の1885年版と同一の内容である⁽³²⁾。

ズパンの教科書と内容的には重なる部分が多いものの、この時期でやや豊富な記述をしているのが、ダニエルの『ギムナージウム用地理』（1895年）⁽³³⁾である。日本の記述は第二部「非ヨーロッパ地域の地理」で見られる（全512ページ中3ページ）。そこでは、日本海的位置・台風の発生・火山があり、入江や港が多数存在すること、などの地勢・気象環境がまず述べられている。モンスーンが夏の暑さを、黒潮が冬の寒さを和らげていることや、植物相などについても触れられている。そして、中国と比較して、文字を始めとして多くのものを中国から学んだものの、清潔さやヨーロッパ文化の進んだ側面を取り入れようとする姿勢については中国とは大きく異なっていると指摘している。ザイドリッツの影響かもしれないが、16世

紀中葉にポルトガルと交流を持ち、またザビエルによりキリスト教の布教が始まったことや、17世紀初めに禁教を実施して、すべての外国人を放逐した、と述べている。そして、内政面では稀にみる専制体制を敷き、服装・住居などについても職業によって細かく規定された規則によって制限され、そのような状況下で平穏が維持された、としている⁽³⁴⁾。このほか、1868年以降の変容について、

ヨーロッパ文化の濫入を促進している現在の皇帝の統治下で、人口稠密な日本は大きな高揚を迎えている。土地はその豊かさ（たとえば銅）で利益豊富な貿易地域となることを約束し、その国民は東アジアで大きな役割を果たす能力があるようだ。というのは、勤勉で、穏和で、昔から熟練して（たとえば工芸技術）、精神的に非常に覚醒しており、非ヨーロッパ文化の他のすべての国民に道徳的に勝ることが、特に女性への尊敬と良質な幼児教育とによって証明されるからである⁽³⁵⁾

と記している。末尾の部分、なかんずく「女性への尊敬」という件には疑問を抱かざるを得ないが、日本がヨーロッパ文化を積極的に摂取しているという評価はズバンなどとも軌を一にするところである。

このように、限られた教科書からも、19世紀において日本関連の叙述が皆無ではないことがわかる。それどころか、むしろかなり早い時期から記載されている。全体のバランスからいえば記述量は少なく、東アジアの項目では何とんでも中国に最大のページが費やされ、それに付随する形で日本の叙述がなされている。叙述傾向としては、地勢や産業などの事実関係の記述に加えて、気候の快適さ、住民の勤勉さ・清潔さなどを始めとして、ヨーロッパ文化の摂取やヨーロッパ諸国を模範としている点などに、おおむね肯定的な評価が盛り込まれているといえよう。そして、具体的始点は1854年から68年まで幅はあるものの、外国との交流開始以後、日本が変容しつつある点はほぼ共通して認めているところである。変容の方向性はこの段階ではまだ不明であるのはいうまでもなく、具体的に記されるとしても、もう少し後の時期になってからであろう。

次節では、20世紀に入って以後、日本関連の叙述がどのようになされているのかをみていくことにする。

2. 第一次世界大戦までの日本の記述

まず初めに、前節でも触れたズパンの1904年版の教科書の叙述を取り上げよう⁽³⁶⁾。

内容は1895年版とほとんど変わっていない。北海道を「エゾ」(“Jesso”)と表記している点も同様である。「中国との戦争以来」台湾(“Formosa”)が日本の領土に加えられたこと、地震が毎年500-600回発生していること、の二点が新しくみられる指摘である⁽³⁷⁾。

このほか、地勢や自然環境に関してもより詳しい記述をしているものが目立つ。たとえば、キルヒホーフの『学校地理』(1902年)⁽³⁸⁾では第二部の中級・上級段階用の教科書で非ヨーロッパ地域の地理が扱われている。アジア全体の自然や地勢が概括された後、各国についての説明がなされ、日本には約1ページ半が割かれて大略次のように記されている。

火山である富士山の標高は3800mで、日本の気候は、暖流である黒潮の影響で夏は暑くて多雨であり、冬は山岳地帯では降雪があるものの概して厳しくはない。低地では米と綿花が栽培されている。「本土」(“Hondo”)はアジアの猿の生息相の最北端であり、北海道(「エゾ」、 “Yezo”)や南方の島では熊が生息している。学問や生産活動では最近まで中国に学んできたが、「清潔さ、好戦性、そして外国の進歩に倣おうとする傾向などでは中国を凌駕している。」日本は、1850年代以降になって初めて欧米諸国と交通を開いたが、驚くべき速さで目覚めた日本国民は、鉄道・商業・軍事・学校制度などに関して、我々の文化の進歩を撰取した。だが、キリスト教についてはまだである。現在の「ミカド」(1868年以來)は政体における旧来の誤用を取り除いた。とりわけ封建領主(「大名」)を克服し、「すべての臣民に平等な権利を与えてやった。」主要な輸出品は中国同様、茶と絹である⁽³⁹⁾。

日本がヨーロッパの文物を積極的に、しかも驚異的な速度で受容している点は頻繁に登場する叙述である。その際に引き合いに出されているのが中国であるのも共通して見受けられる傾向である。

1909年に出されたゾンマーの『民衆および市民学校のための地理』⁽⁴⁰⁾をみてもその点は明らかとなる。全102ページの中で日本についての記述は1ページである。「日本帝国は、アジアのイギリスで、ドイツと同じくらいの大きさである。」こう書き出された後、モンゴル人種である日本人は、「非常に熟練していて、呑み込みが速く、熱心で、控え目で、ヨーロッパの、とりわけドイツの教育や風習を受け入れている」と続き、ヨーロッパ文物の受容の例としては、鉄道・電信などが挙げられている。産物や交通に関しても次のように述べられている。すなわち、米・小麦・大麦を産し、茶・「ワイン」(=酒のことであろう)・煙草などのほか、重要なのが養蚕である。東京と鉄道で結ばれている横浜からはロンドン・ハンブルクへ向けてイギリス・ドイツの船で米・茶・絹・木綿・漆器が輸出されている。京都は漆・銅・陶器・絹織物で有名で、長崎は中国との交通の中心地である。そして、

ロシアに勝利したことにより、日本は東アジアで最初の大国となり、南サハリン・旅順を獲得するとともに、朝鮮帝国(“das Kaiserreich Korea”)を保護領とした。朝鮮はアペニン半島と同じくらいの大きさで同半島に似ており、首都はソウルである

と結ばれている⁽⁴¹⁾。

次に、前節でも触れたダニエルの『地理の授業用手引』をみてみよう。1900年・1905年・1906年・1909年の4つの版で内容は変わっておらず、地勢や気候条件、主な産物など従前みてきたのと同様の記述がなされている⁽⁴²⁾。ただ、見出しが1900年版では1895年版同様に「日本帝国」(“Das japanische Reich”)であったが、1905年版からは「帝政日本」(“Das Kaisertum Japan”)となっている。この中で新しい版である1909年版をみてみよう。全274ページ中約1ページほどの日本の記述では、

日本人は中国人から文字その他多くの有用な知識を得たが、中国より

もはるかに清潔で物分かりがよい。それゆえ、最近では好んでヨーロッパ人を教師として選んでいる。

そのために清国との戦争にも勝利し、「1895年以来山岳地帯の多い大きな台湾という島も日本に属している」と続いている。台湾の領有は1894年版には当然のことながらみられなかった部分である⁽⁴³⁾。

ヨーロッパ文明の受容の速さに驚嘆する叙述は、20世紀に入ってから一層顕著になっているとも言えよう。1908年に出された中等学校用のウーレ著『地理教科書』でも、340ページ中1ページほどの日本の記述の中で、地勢・自然環境などの叙述とともに、人種的にはモンゴル人種に属し、宗教や文明を中国から受け継いでいること、言語・書体が中国と類似していることなどが述べられている。そして、外国に対しては長らく門戸を閉ざしてきたが、

1868年以来、その制限がなくなった。帝国は、世界貿易にその港を開き、西洋文化を全面的に受け入れることを認めた。器用で才能のある国民は、新たな状況の下で急速に堂々たる世界大国へと成長した。皇帝（「ミカド」）政府は、憲法、軍事、学校制度などで全くヨーロッパの見本に従ったのである。商工業の浮揚のために鉄道が敷かれ、工場や機械設備が建設された。今ではすでに茶・絹・紙や漆製品の輸出が著しい⁽⁴⁴⁾

と述べている。

また、ザイドリッツに基づいて著されたゴキシユとレルヒェ共編の『高等女学校用地理』（1910年）では、159ページ中1ページ半が日本の叙述に当てられ、地勢・位置・気候などのほか、「国民と政治経済状況」という見出しで次のように記している。「勤勉で覚えの速い日本人」は、大半が仏教を信仰し、モンゴル人種に属している。米が主食で、茶や絹が重要な輸出品である。樟脳や漆を産し、特に漆器は世界的に評価されている。銅・鉄などが埋蔵されていることは、機械工業・造船業などにも重要な意味を持っている。そして、

それらによって、日本は工業大国となった。とりわけ外国が作り出し

た物を自らのものとしてしまうという驚くべき能力によって、日本人は中国人に抜きん出ている。かつては外国に対して厳しく門戸を閉ざしていたが、この50年来そのように門戸を閉ざすことは止めている。日本人は、ヨーロッパの国家制度を模倣することに成功した。すなわち、軍事制度、学校制度、司法制度などがヨーロッパの手本にしたがって形成されたのである。

さらに、「朝鮮帝国」の保護権を手に入れた点にも言及している⁽⁴⁵⁾。

次に、フィッシャー=ガイストベク『中等学校用地理』(1912年)をみよう⁽⁴⁶⁾。ここでも、ヨーロッパ文明の受容の速さに驚嘆する叙述がある。すなわち、地勢や島国であることなどのほか、政治・経済的な位置づけなど多くの点で「イギリス島帝国との類似性がある」としている。そして、

この10年で日本は世界を驚かすほどヨーロッパ文明の成果を獲得し、それによって東アジアの支配的な海上権力・工業大国となることを成し遂げた(圏点部分は原文では太字)

と述べ、このような変容について、「歴史上日本の工業の発展はほとんど比べるものがない」とも記している⁽⁴⁷⁾。また、スタインハウフとシュミット共編の『中等学校用地理』(1912年)でも約1ページ余りにわたって次のような記述がある⁽⁴⁸⁾。

1868年にアメリカによって開国を強要されて以来、日本はとてつもない経済発展をした。……30年もたたないうちに、帝国が政治的にも形成された。行政制度・軍制・学校制度の諸側面などでは、とりわけドイツの手本に倣った。

そして、ロシアとの戦争で勝利して大方を驚かせた日本は、「もちろん今日でも古代アジア的特質と近代ヨーロッパ的特質との稀にみる融合を示している」としている⁽⁴⁹⁾。

ギムナージウム用教科書であるザイドリッツの『地理』(1918年)についてもみておこう。第3部では全112ページ中約4ページほどが日本の記述で、富士山と大阪市内の写真が掲載されている⁽⁵⁰⁾。地勢・気候などを述

べた後、北部の住民は「アイヌ」で、中南部の住民は「日本人」であると指摘、

住民は欲がなく、勤勉で、覚えが速く、モンゴル人種の中で最も進んだ段階に達している。驚くべき模倣の器用さをもって、彼らはヨーロッパの成果を自らのものとしたのである⁽⁵¹⁾

と述べ、「経済状況」の項目では、「50年来日本はその閉鎖性を捨て、近年急速に経済的成長をしている」として、農耕、養蚕、畜産、石炭・鉄鉱石・銅などの鉱業、そして漁業などの諸産業の振興ぶりに触れ、

近代の重工業が沿岸から内陸へとますます進行していった。日本の位置が、とりわけ貿易の高揚に有利に働いた。鉄道、郵便、電信がヨーロッパのようにはりめぐらされ、軍事制度、学校制度、国家制度は完全にヨーロッパを模倣した。ロシアとの戦争に成功したことで、日本は東アジアの大国となった⁽⁵²⁾

と記している。また、同年出版の第6部では、全128ページ中2ページが日本の記述に割かれ、銅細工職人の作業場の写真も掲載されているが、内容的にはほぼ第3部と同様である⁽⁵³⁾。

ダニエルの『地理の授業用手引』（1913年）は、基本的に1909年版から変わっていないが、新たに付け加えられたのが、「朝鮮半島」の項目で「1910年以來この半島は日本に属している」という記述と、「帝政日本」の項目で、

1912年に、日本ではミカドという称号をつけている皇帝が死去したが、この皇帝は、かつてはあまりにも独立していた封建領主らを臣下とし、国家をヨーロッパ文明の導入によって向上させ、立憲的国家体制を採用した

という件である⁽⁵⁴⁾。

如上の記述をみても、日清戦争・日露戦争を通して日本が台湾・朝鮮を植民地としたこともさることながら、それを可能にさせたのがヨーロッパ文明の受容とそれによる工業化および経済の発達であり、何にもましてその受容の速さが各教科書では関心の的となっているといえよう。その際、ドイツが日本の工業化・ヨーロッパ化に大きく貢献し、日本の側にもドイ

ツの文化や学問に対する親近感があるという認識が背景に存在している。それでは、ドイツと日本が敵国となった第一次世界大戦の後ではどうだったのだろうか。次節では1920年代の日本の記述をみていきたい。

3. 1920年代の日本の記述

第一次世界大戦後になると、新たな事象も含めた記述がみられるようになる。フィッシャー=ガイストベクの地理教科書に基づくミュラーによる改訂版『中間学校用地理』（1926年）⁽⁵⁵⁾では、

日本は大韓帝国、強固な要塞地旅順・港湾都市大連を含む関東州を手に入れた。さらに第一次世界大戦が始まると、日本はドイツ帝国から膠州と、さらにはカロリン諸島・マリアナ群島・マーシャル諸島など太平洋のドイツ植民地領も奪い取った⁽⁵⁶⁾

と書かれ、地勢や産業などについての叙述が続く。そこには、

最近、日本人は、鉄道・電信・産業制度・軍制・学校制度などに関して、ヨーロッパのほとんどすべての進歩を習得した。特に日本はドイツには、医学・地方制度・科学技術・軍事組織などで、多くを得たことを感謝している。抜け目のない政治（ロシアへの勝利、イギリスとの同盟）および日本国民の教育への熱意と向学心によって、日本は大國へと発展した。今日、日本人は近代工業並びに貿易の国民であり、東アジアの支配者となっている。……日本は、農民と漁民の国から、いわば一夜にして近代的な国際貿易国となったのである。ドイツもまた、特筆すべき方法で、この若い大國の発祥を後援したのである⁽⁵⁷⁾

（圏点部分は原文では太字）

と述べられている。

1922年に出版されたザイドリッツのギムナージウム用教科書⁽⁵⁸⁾でも、地勢・気候・人種・産業と主な産物など従来のザイドリッツの叙述を踏襲しているが、

1865年まで日本は中国同様外国に対して門戸を閉ざしてきた。しかし

その時からヨーロッパの文化を国家と経済において模倣し急速に発展した。そして、今日の世界的地位に到達したのである⁽⁵⁹⁾

として、改めて日本の急速な成長に驚いている。また、人口密度の稠密な点も指摘し、工業化に伴う人口の都市部への移動とともに、移民の活発なことにも注目し、どの方面にどの程度日本から移民しているのかを図示している⁽⁶⁰⁾。この図からは環太平洋地域全域に日本が拡大しているかのような印象さえ受ける。そして、「日本の世界的地位」という項目では、この50年来の日本の急成長ぶりを再説し、

日本の内海を我が物にしようとする日本の努力は実現に近づいている。サハリンと朝鮮は日本の手中にある。極東共和国は日本の影響下にある。満州は南部ではすでに日本人に大量に入り込まれている。日本人は、中国市場を彼らの競争相手に対して固守しようと望んでいる。フィリピンと、人口の三分の二が日本人で構成されているハワイでは、日本はアメリカの勢力範囲と激しく衝突している。オランダ領インド[現在のインドネシア、引用者注]でも日本の影響は強まっている。世界大戦以来、日本は国際連盟からマリアナ、カロリン、マーシャルの諸群島の委任統治権を得た。対外的勢力の成長とならんで国内的強化も生じた。日本は大戦中の経済的成長によって債務がなくなったからである⁽⁶¹⁾

と記し、ドイツの影響を日本はさまざまな分野で受けてきた点など、ドイツと日本の密接な関係を最後に述べている。なお、「日本の内海」という表現は、日本海というよりも日本海を含む太平洋の西側半分全域を少なくとも指している（場合によっては太平洋全域）と考えた方がよいだろう。

1920年代に出されたものの中で注目されるのは、ハームスの『詳述 発展途上国の地理』であろう。1920年に出版された同書では、全203ページのうち25ページが日本の記述に当てられている⁽⁶²⁾。また、1928年版では、全体のページ数が272ページになり、日本の記述には35ページが割かれている。この中には、日本が植民地とした朝鮮についての記述も含まれている⁽⁶³⁾。同書の特徴は、このような量的な豊富さに加えて、これまでみて

きた類書に比べ写真が抱負に掲載されている点にもある。さらには、日本の政治・社会経済制度についても歴史的背景も含めて叙述されているところも目を引く。記述量が多いのは、約半分を1900年に世界旅行をしたドイツ人の旅行記から日本関連部分を抜粋して掲載しているためでもある⁽⁶⁴⁾。なお、1922年には短縮版とも言える『非ヨーロッパ地域の大陸』が出されている⁽⁶⁵⁾。1920年と1928年の2つの版の構成はほぼ同様で、1928年版では以下の通りである。1920年版では、このうちのⅡ-2. が「しきたり・宗教・教育」となっている。

I. 土地

II. 国民

1. 歴史

2. しきたり・数字・宗教・教育・ドイツの影響

3. 経済的文化

また、1928年版では、関東大震災（1923年）について、壊滅した東京の様子や地割れの模様を写真を掲載しながら説明しており⁽⁶⁶⁾、金融恐慌（1927年）に関しても次のようにまとめられている。

世界経済との密接な関係は、ここでは残念ながら避けられない自然災害とも結びついて、近年、重大な危機的時期を生じさせた。その危機的時期は日本経済を根底から揺さぶったのである⁽⁶⁷⁾。

関東大震災時のいわゆる震災手形がその後の日本経済にとって大きな桎梏となり、金融恐慌の一因となったことはよく知られている。本書の指摘は正鵠を得ていると言えよう。以下、1928年版を中心に、その叙述を追ってみよう。

地勢や自然環境に関する部分では、定番とも言える富士山の記述が詳細になされるとともに、寺院や茶摘みの様子などの写真を掲載して説明している。幕藩体制下の天皇と将軍、武士と大名などについて簡潔に記した後、次のように述べている。1868年以後皇帝が権力を掌握し、「日本はいわば一夜にして皇帝の統治下で近代ヨーロッパ国家となった」（圏点部分は原文では太字）、「ドイツの手本にしたがって」官庁・議会・軍制をつくり、鉄

道・学校・新聞なども整備した。それによって変化をもたらしたのである。「日本のように急速に、自覚的に、首尾一貫してやり遂げた国家はない。」日清・日露の両戦争を経て、日本は大国の仲間に加わった。朝鮮、南洋諸島なども手中に収め、「膠州は形式的には1922年に中国に返還されたが、日本によってさんざん食い物にされている。」⁽⁶⁸⁾

また、日本人はモンゴル人種に属し、「自らものを作り出す力よりも真似をする才能がはるかに強い」こと、「1871年以来、我が国に類似した教育制度を組織していること」なども指摘し、ドイツと日本との関係について次のように述べている。1870～80年代に日本国家の構造ができると、「日本はドイツの諸制度・学問・軍制に手本を見出した。」日本の憲法をはじめ、医学などの諸学問もドイツに倣い、多くの教員・学生がドイツに留学した、第一次世界大戦では日本はドイツと敵国となったが、ほかの敵国とドイツとの扱いは著しく異なっていたとともに、戦後の1922年にはすでに日独間の貿易高は戦前のそれを上回るに至った、としている⁽⁶⁹⁾。

経済に関しても、農林業・鉱業などの主要産物やドイツとの耕地面積の比較などを図表を交えて記述した後、「日本は長年にわたって計算された工業化政策を余儀なくされており、また実行している」として、手工業や紡績業のほか、化学工業・機械工業などの分野でも近代的な重工業が起きていることを記している。もっとも、日本の重工業は「さらに質の高いものに向上していくべきである」とも付け加えている⁽⁷⁰⁾。

「世界大戦は日本の貿易を非常に加速させたため、アメリカのみならずイギリスにとっても日本は危険となっている。」貿易と交通の項目ではこのような指摘がみられる。日独間の貿易状況も図表を使って示されている。日本はドイツから金属・機械製品などを輸入し、絹製品・織物類・樟脳などの化学製品などを輸出していることがわかるようになっている⁽⁷¹⁾。

第一次世界大戦中の日本の「強力な発達」ぶりにはよほど注目しているらしく、項目を改めて詳述している。「日本が外交の領域で数多く手に入れた利点をまず考察しよう」と述べて、中国のみならず東シベリアやアメリカ太平洋岸での日本の決定的な影響力を指摘している。「日本が隣国と

して中国に有している『特殊権益』という表現が1917年の石井・ランシング協定で登場し、「これによって日本の中国における有利な立場をアメリカが認めた」という。これらを通じて、「日本は満州の日本化を狙っている」ほか、東モンゴルについても日本は自らの勢力範囲とみなしている。また、ドイツ領南洋諸島を手に入れるなど「太平洋の支配」も「もう一つの主要目標である」と述べ、第一次世界大戦中には、太平洋航路の大部分が日本の手に帰したとしている。そして、「国際政治、世界文化、世界経済における日本と、そしてその環境の地政学的主要素、すなわちユーラシア大陸、太平洋・南洋という勢力争いの場、アングロサクソンの巨大な島帝国、といった諸要素と日本の関係とを考察すること」が地理学の課題であろうとして、「広義の文化地理学的事実」としては、インド・中国から日本が影響を受けている点があることや、「世界的評価を受けたいという国民の意欲と実績」などにも言及している⁽⁷²⁾。

著しいのは、日本国民は所与の地政学的教えにおいて、無意識に本能的にハンドルのように東アジアの情勢を取り入れ、帝国の発展のために意識的にそれを利用していることである。

こうも記して、日中間の沿岸地域に対する注意が必要で、「帝国主義的沸騰」を再来させる可能性もあることを指摘している⁽⁷³⁾。地政学的関心の高まりがうかがわれよう。

このほか、前節でも触れたズパンの『ドイツ学校地理』(1929年)も出されている。全388ページ中日本の記述は4ページだが、日本は「アジア版のイギリスである」と規定して、自然環境や経済的發展などを歴史事象や統計数字などを交えて述べている⁽⁷⁴⁾。「日本の強力な膨張傾向は、一つには、工業的・資本主義的の制度への移行の結果である。……第二の理由は、毎年1,000人当たり10.6人という出生率過剰から生じる、強力な人口増加である。」こう記したうえで、ハワイなど環太平洋地域への移民が論争的となった点を指摘し、その理由を次のように述べている。

強固な郷土感情のために外国の国民性とうちとけることができず、その安価な賃金は既存の白人労働者の生活水準を低めるように強いる作

用をするためである。

そして、

野蛮に閉鎖され、砂岩がちで、英米の資産である温暖な太平洋への渴望を不可避なものとするか、冬の寒さの北方地域で満足するのは、日本にとって恐らく宿命の問題である

と結んでいる⁽⁷⁵⁾。

また、ヴェチュケの『我々の大地』(1928年)では「地政学的地理学」という章を設け、アジアの部分では日本も「中国」・「東アジア・東南アジアの摩擦地帯」と並んで1つの項目として取り上げられている。わずか2ページほどの記述であるが、日本の領土拡大の様子が図示されている。そして、

日本の国土は常に増大する人口には余りにも狭く、人口増加はそのため、なお一層の海外移民を強いている。その方向は、計画的に太平洋の島嶼と沿岸地域に向けられている⁽⁷⁶⁾

と述べている。

地政学的叙述および日本の移民や膨張傾向への注意と関心を示す叙述は、偶然とはいえ日本国内におけるいわゆる南進論・北進論の議論とも符節を合わせるものがある⁽⁷⁷⁾。換言すれば、意識的にせよ無意識的にせよ、日独両国の中で、それだけ地政学的観点が強まっているということもできるだろう。次節では、一般的にそのような傾向がさらに強まるとされる1930年代の叙述をみることにしたい。

4. 1930年代の日本の記述

まず、1930年に出されたシュヴァルツほか著『専門学校・職業学校用地理』を取り上げてみよう⁽⁷⁸⁾。全330ページの中で約2ページほどの日本の記述には、浅草界限とおぼしき写真1枚が載せられている。そして、関東大震災にみられるような地震の多さなどの自然環境、急速にヨーロッパ文明を摂取して中国を追い越し、東アジアの指導的国家となっていることなどを述べている。経済分野では、つましい国民の安価な労働力によって、

アジア市場でヨーロッパの諸企業と競争しているが、人口過剰のためにさらなる膨張を準備しているとして⁽⁷⁹⁾、

日本は、すべての方面で植民地を手に入れた。サハリン・朝鮮・台湾・南洋ドイツ領である。日本は、太平洋の島々や沿岸部への移民を計画的に指導している。それをそっけなく拒否するオーストラリアとアメリカの姿勢が、東アジアの移民による太平洋沿岸への平和的侵入を阻止している⁽⁸⁰⁾

と記している。実際、移民による日米間の軋轢は、1900年前後から四半世紀にわたる外交問題となった。上にみられるような叙述は、前節でも指摘したように、1920年代から続いている。そしてそれは、その後の日本の膨張傾向がさらなる摩擦を生じる可能性を予言しているかのようでもある。

日本の急速な発展とドイツとの関係に関する指摘は、1930年代に入っても依然としてよく見受けられる。スタインルック著『地理の授業』(1932年)でもそれは当てはまる⁽⁸¹⁾。全261ページ中約4ページほどが日本の記述に当てられているが、地勢などの点でもイギリスと似ていること、第一次世界大戦以前は日本はドイツに多くの留学生を送り、さまざまな分野を学んだことが述べられている。さらに両国間の商工業や貿易関係の緊密化は、在日ドイツ人の増加にもつながった。

しかし、中国膠州の獲得、ドイツ皇帝が言いだした「黄禍論」の強調などもあって、第一次世界大戦では日本はドイツの敵国となった。しかし、[ドイツ人の] 戦争捕虜は、ほかの国民よりも日本国民からはよい扱いを受け、日本からドイツ人が一掃されることはなかった⁽⁸²⁾

と日独間の関係の良好さを指摘している。

日本はアジア的文化の民族の中で最も速く西洋文明を摂取し、それによって世界的大国になったのである⁽⁸³⁾

と、これまでみてきた西洋文明を取り入れたことによる急速な変化の叙述を踏襲している。

やはり1932年に出されたザイドリッツのギムナージウム用教科書では、

全140ページのうち6ページ近くが日本の記述に当てられている⁽⁸⁴⁾。叙述は前節でみた1922年版をほぼ踏襲しているが、この間の変化にも触れている。たとえば、日本の主な移民先を示した図を掲載し、インドや太平洋の諸島を含め、より広汎な地域への日本の膨張ぶりが示されている⁽⁸⁵⁾。そして、「日本の世界的地位」という項目では、その図を参照させながら、次のように述べている。

日本の世界的地位は、聡明で目的意識を持ってその位置を利用したこと、急速なヨーロッパ化、20世紀の戦争で勝利をあげたことで最も驚嘆させるほどによく示した日本人のいつでも戦争をしようという姿勢、などのゆえに高められたため、今では世界の大国に数えられている。日本は中国北部からベーリング海までの東アジアの海を自らのものとして支配し、その移民によって環太平洋諸国やさらにその先の国々における足がかりをつかんでいる⁽⁸⁶⁾（圏点部分は原文では太字）。

この後に具体的な地域ごとに日本の膨張ぶりを叙述している。

1930年代も半ばになると、それまで以上に地政学を前面に出したものが現われてくる。エッカートの『新しい地理学』はその典型である。全2巻の大部な本書には、1935年に出された第2部後半で12ページほど日本について記述している⁽⁸⁷⁾。

日本帝国は、我々が政治地理学で知っている独特の帝国であると同時に、自然の景域と国家意思との間の相互作用から千年の時の経過のうちに生じてきた国家でもある⁽⁸⁸⁾。

このように書き始めて歴史的経緯をまとめている。中国との関わりや文化的背景について触れた後、日本は「東アジアのイギリス」であると述べながら、さまざまな点で「日本人は西欧の人間にとっては異なる精神類型」をしているという。中国からの文化的諸影響、日本人の器用さ等々とともに、外国に門戸を開いてからは西欧に倣ってその特性を我が物とした点も指摘している。日本の景域が変化に富んでいる点を、気候・地勢などに関連させながら記し、人口密度の高さ、産業・交通などについても詳述している⁽⁸⁹⁾。

これらの叙述以上に注目されるのが、「アジア国家群の政治地理」という項目である。「アジアではあらゆる巨大なものが我々に立ち向かう。」こう記して、面積・人口などに関する数字を示している。「このような気味の悪い土地の大きさにもかかわらず、とりわけこの地域の政治的な力はいまだ隠されている。」続けて、

そこでまず、恵まれた位置と経済条件にあるより小さい規模の国家が、大きな外貌をまとうまでに発達した。その国家は巨大な勢力範囲の扉の前でケンタウロスのように横たわっている。それが日本であると述べている。そして、人口・領土などの大小を比較して、東アジアでは中国・日本・ソ連が大国で、それ以外は小国であると断じ、

国家の大きさに比例して、一般的にその地政学的諸問題が生じてくる。しかも現代はそれを一層急速にさせているのであると述べ⁽⁹⁰⁾、さらに

東アジアはもはや欧米の人々だけの商売範囲ではない。日本人が大きな競争相手としてその中に加わっている

と日本の存在が非常に大きくなっていることも指摘している。その際、日本は「一部は武力によって」日清戦争以来、中国大陸に急速に地歩を固めた点も付け加えている。「日本ほど短期間に世界大国へと強大化した国家は地球上に存在しない。」おなじみとなった叙述はここでも目にする⁽⁹¹⁾。

これに続けて、「日本の目標は、全中国の総指揮権を手に入れることである」として、以下のように述べている。明らかに「日本の恩恵による国家」である「満州国の設立」はその最初の結果で、ここ何年かは「嵐の中心」となる。というのも、「中国・^{〔ママ〕}ロシア・日本の三大国が微妙な関係にあるからである。」いずれにしても、「これが日本の影響下にある大陸国家建設の始まりである。」そして、アジアでの「新しい世界史的な緊張は、ヨーロッパにも反作用をもたらすのは自明のことである」とも述べ、日ソ間の武力対決が切迫していると指摘、中国を共産化したいと考えるソ連に日本が立ちはだかっていることや、ヨーロッパではドイツが、アジアでは日本がそれぞれ最強の対立者であるとコミンテルンは認識していること、

などにも言及している。さらに、太平洋地域や貿易をめぐる日本とアメリカ・イギリスとの対立、なかでも日米間の対立の激化に言及し、

厳しく、粘り強く、日本はその目標を追求している。その目標とは「日本の指導の下にあるアジア人のアジア」というもので、目的意識をもった移民の中に表明されている

と後の「大東亜共栄圏」を見透かしたかのごとき表現に出会う。最後に、ソ連とイギリスとのペルシア・アフガニスタンなどをめぐる対立を含め、「^マソ^マヴィエト^マ＝^マロシアが日本と戦うか否かは、いずれにしても、パキスタンなどの地域に手を伸ばして獲得するかどうかによっている。」このように、地理というよりも現状分析的な叙述が本書にはみられる⁽⁹²⁾。

前世紀からの伝統があるザイドリッツの教科書でも如上の傾向は現われている。1936年に出されたムールとクラウゼ共編の『ザクセン州ギムナジウム用ザイドリッツ地理』を例にとると⁽⁹³⁾、174ページのうち約4ページが日本の記述に割かれているが、地勢・自然環境などの記述の後で、以下のような叙述に出会う。

日本は東アジアの制海権を握り、太平洋における支配的地位を占めようとしている。中国は日本人の技術者と商人とでまさしくあふれかえっている。満鉄の一部は日本の支配下にあり、華北では日本人が入植権と鉱山採掘権とを有している。華北の占有をめぐるは、日本と中国とが争っている。人口の増加分を収めるためだけでなく、不足している生活物資と原材料とを確保するためにも、日本は少なからぬ植民地帝国を何とか手に入れた。台湾、南サハリン、関東半島、そして朝鮮が侵略された（圏点部分は原文では太字）。

そして、日本とドイツとの関係について、第一次世界大戦による中断はあったものの、それ以前から密接であり、貿易関係のみならず政治的にも両国は共同歩調をとっていると記している⁽⁹⁴⁾。

1939年のヤンツェン編『中等学校用ザイドリッツ地理』でも地政学的観点からの叙述がみられる。全128ページに豊富な写真図版を加えた本書は、冒頭部分で「世界の貿易、交通、そして政治はヨーロッパだけに根づいて

いるわけではない。東アジアでは日本が新たな世界的競争者として登場してきている」と指摘し⁽⁹⁵⁾、日本の記述に17ページも割いている。その叙述のいくつかをみてみよう。

「政治的躍進」と題された項目では、従前の日本の歴史的経緯が簡略に述べられている。すなわち、19世紀中葉に英米露などと貿易協定を結んだ頃までは封建国家であったが、1868年以降「国家改革と強力な中央権力の形成」が行われ、その時から日本は

太平洋地域の広大な領域へ拡大し始め、今日までの間に、あらゆる反対にもかかわらず成功裡に拡大し得た。10年の間に、小笠原諸島・琉球・台湾・クリル諸島・南サハリン・朝鮮が日本のものとなった。

^[ママ]1931年には満州国が日本の従属国としてつくられた。1937年以降中国における軍事的行動が、日本の産業のために必要不可欠な原料と販路を確保するという目標を同時に推し進めている⁽⁹⁶⁾。

そして、「日本の政治的躍進」、「かつての国家体制」、「固有の文化の展開」、「経済的・政治的勢力の急速な発展」といった中に、「一民族の強固な生への意志」がみられる、としている。その「意志」は、「活動余地の状況が不利であることを宿命的なものとしては受け止めず、その不利な状況を全精力を活発に動員するための絶え間ない刺激として感ずるのである」と指摘している⁽⁹⁷⁾。この項目で参照すべき写真として挙げられているのが、銀座とおぼしき街角を歩く女性の姿である。そこには、洋装の女性と着物姿の女性が混在している風景が映され、このような街頭の様子自体が日本の発展ぶりを例示しているとの説明が付け加えられている⁽⁹⁸⁾。

「政治的躍進」は経済発展とも連動しているとして、経済の発展に関してもかなり詳しく述べている。「1895年まで日本はほぼアジア的農業国であった。」輸出品の大半は原材料であったからである。第一次世界大戦までの20年間にその様相は変化し、絹と茶を除いては、工業製品の輸出が次第に増えていった。その市場は中国・インドといった近隣諸国である。それでも工業生産の多くは初期的段階にとどまっていたが、第一次世界大戦でヨーロッパの工業国が製品を輸出できなくなると、日本の工業大国へ

の躍進がヨーロッパを手本として開始された。造船・鉄鋼・製鉄・染色・化学などの諸分野で大きな拡大がみられた。「これらの対外的発展は戦後もなんら特に強烈なゆり戻しを被らなかった。」生糸が重要輸出品であることに変わりはないが、第一次世界大戦中から綿製品が急伸し、中国やイギリス・オランダの植民地といった市場で氾濫し始めた。「白人の世界貿易に対する大きな攻撃は、まず大陸への軍事侵攻で、そして同時に生じた円の切り下げで始まった。」日本製品は今や欧米の製品に劣らない品質で、すべての世界市場で競争者として出現している⁽⁹⁹⁾。

「世界貿易における日本の地位」という項目では、このような成長を示した日本経済の構造的背景を以下の如く説明している。「世界貿易での日本の分け前は、自らの産業を不断に創出している結果として、絶えることなく増え続けている。」1931年以降の改善は、円の切り下げによるところが大きく、保護関税なしでも日本の輸出はなお一層増大しただろう。日本の労働者は、単純な生活水準で満足しており、加えて女子労働力の低廉さや共同住宅・共同賄いの形態による労賃支払いなどによって、安価な労働賃金のために製品価格を安く設定できる。また、日本の市場は中国やイギリス・オランダ領インド（現在のインドネシア）へ拡大しているが、運賃の点で大きな利点があり、これらの地域は今では日本の輸出の三分の二を占めている⁽¹⁰⁰⁾。

このような経済力が「大帝国」の基礎となっている、として、「大帝国と外交」という項目が設けられている。「日本の大帝国」という図では、「日本と同盟している」地域として「満州国」が、「日本の影響下にある」地域として「内モンゴ」が、「日本が中国から占領した」地域として華南・香港が示されている⁽¹⁰¹⁾。さらに叙述内容をまとめてみると次のようになる。

日本は、朝鮮・台湾・ミクロネシア諸島などを手に入れたが、これらの地域は日本に重要な経済的援助をもたらしている。そして、1931年以後の大陸への侵攻は、日本の工業のためには新たな原料供給地を、農民のためには新たな入植地をもたらした。しかし、「満州国」を手に入れたことで、

原料供給地が平和的に拡張されることはなく、気候状況が合わないため、入植の試みも完全に失敗した⁽¹⁰²⁾。日独関係は第一次世界大戦以後改善されており、1933年以降は、両国間の友好関係が存在する。政治・経済・文化の諸側面での条約・協定でそのような印象が見受けられ、これにイタリアも加わった。「この島帝国の特筆すべき意味合いは、満州国、ソ連という最も強大な近隣諸国に対する位置である。」そこで重要なのがソ連との関係の保証で、「宗教的熱情をもって高められた、アジア諸民族を指導しようという要求をさらに追求するために、その保証を日本は必要とする。この目標を信じる中で、日本国民と日本国家は、日本の中に驚嘆すべき閉鎖的の一体性をともに打ち立てるのである。」⁽¹⁰³⁾

このように結んだ本書は、日本でいう「地理」ではなく、地域研究・国際関係論的叙述の色彩が強い。上に紹介した叙述は、現状分析とでもいべき性格のものであり、伝統的なザイドリッツの教科書でもこのような傾向が顕著になったところに1930年代の時代状況を垣間見ることができるといえよう。そして、日独関係の密接さ・良好さが強調されているのも目を引くところである。

日本の急速なヨーロッパ化とそれに並行する大国化への驚きは、1930年代に入って極点に達した感がある。日本は、ヨーロッパの文物や制度を忠実に模倣する優等生的存在ではなく、あらゆる面での対立を惹起する可能性が次第に顕著となった危険な存在としての側面が強く意識されてきている。さらに、地政学的観点からの叙述が強まっている点と合わせてみれば、そのような日本と同盟するに至るドイツの対外政策とも、如上の日本像は連関しているのではないだろうか。

おわりに

ドイツの日本像はどのように移り変わってきたのか。およそイメージに関わる問題を取り上げるときには、その変遷の様子と理由がまず注目される点であろう。冒頭でも述べた通り、本稿では限られた資料から一つの素

描を試みることに目的であり、包括的な結論をここで出すことは性急に過ぎるであろう。しかしながら、地理教科書という限られた材料に限定して、その中の日本に関する記述内容を追うことでも、日本像の変遷の様子はある程度浮かび上がってくる。

まず、記述項目として、地勢・気候・自然環境・人種といった項目はほぼいつの時期においても不可欠のものとして触れられている。自然地理的な性格が強くとこれらに関する記述量が増し、逆に人文地理的傾向が強いのだと、これらよりもむしろ日本の国民性・産業とその発達・国際関係と日本の政策的側面といった諸要素にも十分な注意が払われるのである。最初に掲げた三宅島噴火の新聞報道などは、如上の教科書記述を踏まえれば、火山帯で地震が多発する日本という19世紀以来の日本像が背景に存在しているとも思われる。19世紀においては、日本の地理的閉鎖性や欧米諸国との交流を長く閉ざしていた点を強調する叙述に多く出会う。情報量は十分とは言えず、断片的に文化・習慣にも触れつつ、ヨーロッパとの異質性を指摘する傾向がある。だが、一度交流が開始されると（その始点については第一節でみたように1854年から68年まで幅があるが）、日本人が積極的にヨーロッパの文物・制度を模倣していることへの好印象が高まっていく。特に中国人と対比した場合に、それが顕著となる。勤勉さ、清潔さ、聡明さ、活動的、勇敢、工芸技術における熟練性、教養をある程度以上身につけていること、名誉心に富んでいること、といった類の形容が日本人に関して用いられている。また、たとえば、ダニエルの1895年版『ギムナジウム用地理』にみられるように、これらの諸特性に加えて穏和であるという評価が肯定的に指摘されている点は注意してよいだろう。要するにこの時期では、ヨーロッパ化という方向で日本の変容が開始されたという認識でほぼ一致し、それがゆえに日本への好印象が増しているといえよう。

20世紀に入ると、情報量の点でも次第に蓄積がなされ、具体的叙述が増えていく。それとともに、日本の変容の速さに対する驚きも多く記されるようになる。ヨーロッパ化・工業化・都市化の急速な進展に目を見張る一方、諸制度やさまざまな文物がすべてヨーロッパのものを模倣した上で形

成・製作されている点なども繰り返し指摘されている。そして、戦争を通して台湾や朝鮮を植民地として領有するなど、日本は次第に領域の拡大を進め、東アジアでの支配的地位を確立したという評価がなされる。「島帝国」であるイギリスとの類似性を指摘する点も注目される。第一次世界大戦以前の段階では、このような日本の「大国」化の速さ自体に対して、単純に、しかしながら非常に驚嘆している。また、この過程におけるドイツの影響の大きさも重視されている。

第一次世界大戦後になると、第一次世界大戦で日本がドイツの敵国となり、山東半島とドイツ領南洋諸島を日本がドイツから奪ったことは欠かすことができない叙述となった。また、ヨーロッパ化が日本の「大国」化をもたらしたのみならず、日本がさらに膨張傾向を強めていることが強調して述べられるようになる。この段階になると、従前よりも踏み込んで、日本の急速な「大国」化と強い膨張傾向の理由や背景を検討するようになった。主たる要因として考えられているのは、工業化への移行と人口増加などである。また、領域の拡大は武力による侵略のみならず、移民の増加という手段によっても行われていることも着目されている。いずれにせよ、東アジア・環太平洋地域で日本は摩擦を激化させる要因となりつつあった。それまで単純な驚きであった日本の急速な「大国」化は、ここに至って不安に変貌する。そして、今後日本がどの方面に勢力を拡大していくのか、という問題は予測不能であると同時に、極めて現実的に解答を出さねばならない問題となった。その答えを求めて地政学的観点が浮上してくる。

1930年代に入るとその傾向はなお一層強くなるとともに、日本の政策や行動を予測する現状分析的叙述が目につくようになる。いつでも戦争する用意があるという日本人の好戦性は、20世紀に入って指摘されるようになってきたが、エッカートやザイドリッツにみられるように、さらに強まってくる。半世紀前には穏和であるというイメージが、この50年ほどの間に徐々に好戦的な国民というイメージに変化したといえよう。膨張傾向への不安と好戦性イメージの高まりが日本像の変化の一つであるとするれば、もう一つは日本の変容を構造的に説明しようとする傾向の明確化である。後者に

については、1920年代から継続してみられるといえるが、いまだ十分とはいえない。伝統的な自然地理的叙述はまだ残っている。

日本は、アジア・太平洋戦争後再び大きな変容を迎える。いわゆる高度経済成長がそれだが、その際ドイツからみた日本像はどのように変化したのであろうか。この点については、本稿の続編として遠からぬうちに検討したいと考えている。

(注)

- (1) *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 31. 8. 2000, S. 18.
- (2) a.a.O., S. 13.
- (3) *Berliner Morgenpost*, 31. 8. 2000., S. 8.
- (4) *Die Welt*, 2. 9. 2000, S. 40.
- (5) そのうちの一部については、すでに以下の拙稿で論及している。「自由民権期におけるイギリス功利主義思想の摂取——陸奥宗光とジェレミィ・ベンサム」(『現代史研究』、第35号、1989年12月)、「陸奥宗光講義ノート——シュタインとの出会い」(『金沢文庫研究』第291号、1993年9月)、“Mutsu Munemitsu and His Lecture Notes from Lorenz von Stein” (『敬愛大学国際研究』第1号、1998年3月)、「近代日本における国家学の受容(その一)」(敬愛大学環境情報研究所『環境情報研究』第6号、1998年4月)、「近代日本における国家学の受容(その二・完)」(『敬愛大学国際研究』第4号、1999年11月)、などを参照。
- (6) たとえば、1909年9月28日から10月1日までオーストリアのグラーツで開催された第50回ドイツ教員集会(原語の“Philologen”には文献学者という訳語が散見されるが、実際には古典語を担当する大学卒の教員(主にギムナジウム)を指す。その他の科目を担当する教員が“Schulmänner”となっている。そのためここでは両者をまとめて「教員」と訳した)では、地理の授業と歴史の授業との関係についての講演が行われている。そこでは、歴史にもそれぞれの地域の住民の知識が必要である点と同時に、地理の教師も歴史家の見解を基礎として、国民経済学や社会学の特徴に熟達する必要があることが指摘されている(*Verhandlungen der Fünfzigsten Versammlung Deutscher Philologen und Schulmänner in Graz vom 28. September bis 1. Oktober, 1909*, Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1910, S. 183–184)。
- (7) Felix Lampe, *Erkundung in der Mittelschullehrer-Prüfung*, Berlin: Gerdes & Hödel, Pädagogische Verlagsbuchhandlung, 1908, S. 5–7.
- (8) Gustav Rusch, *Methodische Fragen und Aufgaben aus der Geographie und Geschichte*, 2. Aufl., Wien: Verlag von A. Pichler's Witwe & Sohn, 1897, S. 37–49. 本書の第5章が「市民学校教員候補者の論述試験のテーマ」(Themen für die schriftliche Prüfung der Candidaten des Lehramtes an Bürgerschulen)となっている。ドイツの諸学校の名称を日本語に訳すのは困難が伴う。特に本稿で扱っている時期のドイツは、階級社会・学歴社会という性格によって貫かれていた。そのため、階級別に学校体系が存在していた側面も見逃せない。以下個々に注記はしないが、学校名称については、梅根悟監修『世界教育史大系 12 ドイツ教育史 II』、講談社、1997年、望田幸男編『国際比較 近代中等教育の構造と機能』、名古屋大学出版会、1990年、荘司雅子監修『現代西洋教育史』、亜紀書房、1984年、望田幸男ほか訳『歴史の中の教師たち』、ミネルヴァ書房、1987年、などを参照して訳出した。
- (9) Alex Supan, *Deutsche Schulgeographie*, Gotha: Justus Perthes, 1895, S. 215–218.
- (10) a.a.O., S. 173.

- (11) Ebenda.
- (12) a.a.O., S. 173–174.
- (13) Alex Supan, *Lehrbuch der Geographie für österreichische Mittelschulen und verwandte Lehranstalten*, 6. Aufl., Laibach: Verlag von Ig.u.Kleinmayr&Fed.Bamberg, 1886.
- (14) a.a.O., S. 82. なお原語表記では、“Japanesen und Koreaner”となっている。
- (15) a.a.O., S. 92.
- (16) Ernst von Seydlitz, *Schul-Geographie. Größere Ausgabe des Leitfadens für den geographischen Unterricht*, Breslau: Ferdinand Hirt, 1874.
- (17) a.a.O., S. 55.
- (18) C. Stolte, *Lehr- und Übungsbuch für den Unterricht in der Geographie*, Neubrandenburg: Verlag von C. Brunslow, 1874, S. 41. 本書は全63ページの小冊子で、日本の記述は半ページにも満たない。
- (19) Wilhelm Rohmeder, *Theodor Schachts Lehrbuch der Geographie alter und neuer Zeit mit besonderer Rücksicht auf politische und Kulturegeschichte*, 8. Aufl., Mainz: Verlag von C. G. Kunzes Nachfolger, 1874.
- (20) a.a.O., S. 466.
- (21) a.a.O., S. 467.
- (22) Karl Arendts, *Leitfaden für den ersten wissenschaftlichen Unterricht in der Geographie*, 19. Aufl., Regensburg: Druck und Verlag von Georg Josef Manz., 1880.
- (23) a.a.O., S. 313.
- (24) a.a.O., S. 314.
- (25) Hermann Jaenicke, *Lehrbuch der Geographie für höhere Lehranstalten*, Zweiter Teil, Breslau: Ferdinand Hirt, 1884.
- (26) H. J. Klein, *Lehrbuch der Erdkunde für höhere Lehranstalten*, 2. Aufl., Braunschweig: Druck und Verlag von Friedrich Vieweg und Sohn, 1885.
- (27) a.a.O., S. 248.
- (28) H. A. Daniel, *Leitfaden für den Unterricht in der Geographie*, 176. Aufl., herausgegeben von B. Volz, Halle a. S.: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1891. H.A.Daniel, *Leitfaden für den Unterricht in der Geographie*, 198. Aufl., herausgegeben von B. Volz, Halle a. S.: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1894.
- (29) a.a.O., 1891, S. 73; a.a.O., 1894, S. 74.
- (30) Wilhelm Pütz, *Leitfaden der vergleichenden Erdbeschreibung*, 24. Aufl., bearbeitet von F. Behr, Freiburg im Breisgau: Herdersche Verlagshandlung, 1895.
- (31) a.a.O., S. 176.
- (32) H. J. Klein, *Lehrbuch der Erdkunde für höhere Lehranstalten*, 4. Aufl., Braunschweig: Druck und Verlag von Friedrich Vieweg und Sohn, 1898. 本書は全372ページだが、日本の記述は1885年版同様1ページ弱である。
- (33) A. Daniel, *Lehrbuch der Geographie für höhere Unterrichtsanstalten*, 76. Aufl., herausgegeben von B.Volz, Halle a.S.: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1895.
- (34) a.a.O., S. 103.
- (35) a.a.O., S. 104.
- (36) Alex Supan, *Deutsche Schulgeographie*, 7. Aufl., Gotha: Justus Perthes, 1904.
- (37) a.a.O., S. 173.
- (38) Alfred Kirchhoff, *Erdkunde für Schulen, II. Teil.: Mittel- und Oberstufe*, 9. Aufl., Halle a. S.: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1902.
- (39) a.a.O., S. 153–154.

- (40) Otto Sommer, *Kleine Erdkunde für Volks- und Bürgerschulen*, 5. Aufl., Braunschweig: E. Appelhans & Comp. B.m.b.H., 1909.
- (41) a.a.O., S. 70.
- (42) H. A. Daniel, *Leitfaden für den Unterricht in der Geographie*, 227. Aufl., herausgegeben von W. Wolfenhauer, Halle a. S.: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1900. a.a.O., 246. Aufl, 1905. a.a.O., 249. Aufl., 1906. a.a.O., 263. Aufl., 1909.
- (43) H. A. Daniel, a.a.O., 1909, S. 78.
- (44) Willi Ule, *Lehrbuch der Erdkunde für höhere Schulen*, Zweiter Teil, 7. Aufl., Leipzig & Wien: G. Freytag & F. Tempsky, 1908, S. 197. 「中等学校」(höhere Schule)とは、主にギムナージウムが中心だが、実科学校の一部などを含む場合があるため、あえてギムナージウムとはしなかった。
- (45) P. Gockisch und O. Lerche, *Erdkunde für Höhere Mädchenschulen*, Zweiter Teil, Breslau: Ferdinand Hirt, 1910, S. 69–70.
- (46) Fischer=Geistbeck, bear. von Hans Bappert, *Erdkunde für höhere Schulen*, Viertes Heft: Für die untere Seminarklasse, Berlin und München: Druck und Verlag von R. Oldenbourg, 1912. 「下級ゼミナールクラス用」という表記を考えると、本書は中等学校用教科書のほかに、教員養成学校などでも用いられた可能性があるが、ここでは便宜的に「中等学校用」としておいた。
- (47) a.a.O., S. 66.
- (48) A. Steinhaff und M. Eg. Schmidt, *Lehrbuch der Erdkunde für höhere Schulen*, Dritter Teil: Für Untertertia, 2. Aufl., Leipzig und Berlin: Druck und Verlag von B. E. Teubner, 1913.
- (49) a.a.O., S. 46.
- (50) U. Rohrman und W. Muhle (hrsg.), *E. von Seydlitz Geographie, Für höhere Lehranstalten*, Dritter Teil, 5. Aufl., Leipzig: Ferdinand Hirt & Sohn, 1918.
- (51) a.a.O., S. 95.
- (52) a.a.O., S. 96.
- (53) U. Rohrman und W. Muhle (hrsg.), *E. von Seydlitz Geographie, Für höhere Lehranstalten*, Sechster Teil, 3. Aufl., Leipzig: Ferdinand Hirt & Sohn, 1918, S.74–76.
- (54) R. Fritzsche (bearb.), *H. A. Daniels Leitfaden für den Unterricht in der Geographie*, 270. Aufl., Halle a. S.: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1913, S. 148–149.
- (55) Albert Müller (bearb.), *Erdkunde für mittlere Schulen, Auf Grund der von Fischer und Geistbeck herausgegebenen erdkundlichen Lehrbücher*, Teil IV Außereuropäische Erdteile, Berlin und München: Druck und Verlag von R. Oldenbourg, 1926.
- (56) a.a.O., S. 37.
- (57) a.a.O., S. 39.
- (58) U. Rohrman (hrsg.), *E. von Seydlitz Geographie, für höhere Lehranstalten*, Drittes Heft, 15. Aufl., Breslau: Ferdinand Hirt, 1922. 巻末に写真図版がまとめて掲載されており、日本に関しては和室の様子、三溪園かと思しき横浜の日本庭園、奈良の風景、の三葉が解説つきで載せられている。
- (59) a.a.O., S. 54.
- (60) Ebenda.
- (61) a.a.O., S. 55.
- (62) Heinrich Harms, *Erdkunde in entwickelnder, anschaulicher Darstellung, III. Band, I. Teil, Asien*, 2. Aufl., Leipzig: List & von Bressonsdorf, 1920. 日本の記述は159–183ページにみられる。
- (63) Heinrich Harms, *Erdkunde in entwickelnder, anschaulicher Darstellung, III. Band, I. Teil, Asien*, 4., von E. Oppermann bearbeitete Auflage, Leipzig: List & von Bressonsdorf, 1928.

日本の記述は211-245ページにみられる。

- (64) Egon Kunhardt, *Wanderjahre*, Berlin: Verlag Dietrich Reimar. この場合も含めて、本稿で取り上げた教科書の記述がどのような情報に基づいてなされているのかは、それ自体で十分検討に値する課題である。この点に関してはいずれ稿を改めて分析する予定でいる。
- (65) Heinrich Harms, *Die außereuropäischen Erdteile*, Kleine Ausgabe, 3. Aufl., Unter Mitarbeit von Dr. Berbing, Leipzig: List & von Bressonsdorf, 1922. 全208ページ中、日本の記述には4ページが当てられている。
- (66) Harms, *Erdkunde in entwickelnder, anschaulicher Darstellung*, 1928, S. 212-213.
- (67) a.a.O., S. 225.
- (68) a.a.O., S. 224.
- (69) a.a.O., S. 225-227.
- (70) a.a.O., S. 227-230.
- (71) a.a.O., S. 231.
- (72) a.a.O., S. 232-234.
- (73) a.a.O., S. 234.
- (74) Hermann Lautensach (bearb.), *Prof.Dr.A.Supans Deutsche Schulgeographie*, 14. Aufl., Oberstufe, Gotha: Justus Perthes, 1929, S. 344.
- (75) a.a.O., S. 347-348.
- (76) J. Wütschke, *Unsere Erde Erdkundliches Lehrbuch für höhere Schulen*, Oberstufe, Leipzig: Verlag von Quelle & Meyer, 1928, S. 144.
- (77) 筆者はこの点に関しても関心を抱いている。とりあえず、19世紀末から20世紀初頭にかけての分析については、第5回東アジア近代史学会での報告「世紀転換期における日本の対外『発展』論」(2000年6月25日)、ならびに「竹越與三郎のアジア認識」(『藤村道生教授追悼記念論文集』2001年4月、掲載予定)を参照。この後の時期についても、別稿で検討する予定である。
- (78) Sebald Schwarz, Walter Weber, und Walter Rosenfeld, *Erdkundebuch für Fach- und Berufsschulen*, Frankfurt a. M.: Verlag Moritz Diesterweg, 1930.
- (79) a.a.O., S. 216.
- (80) a.a.O., S. 217-218.
- (81) Franz Steinruck, *Der Unterricht in der Erdkunde*, 2. Aufl., Ansbach: Michael Prögel Verlag, 1932.
- (82) a.a.O., S. 256.
- (83) Ebenda.
- (84) A. Rohrmann(hrsg.), *E. von Seydlitzsche Geographie, für höhere Lehranstalten*, Drittes Heft, 22. Aufl., Breslau: Ferdinand Hirt, 1932. なお、巻末に写真図版が添えられているのも前掲の1922年版と同様だが、長崎の風景と若い女性の乗った人力車の様子の二葉で、1922年版とは異なっている。
- (85) a.a.O., S.94.
- (86) a.a.O., S.95.
- (87) Max Eckert, *Neues Lehrbuch der Geographie*, II. Teil, 2. Hälfte, Berlin: Verlag von Georg Stilke, 1935. なお、第1部は1931年に、第2部前半は1933年にそれぞれ出版されており、これら3冊の総ページ数は1,575ページにも及ぶ。
- (88) a.a.O., S. 1226.
- (89) a.a.O., S. 1226-1231.
- (90) a.a.O., S. 1231-1232.
- (91) a.a.O., S. 1232-1233.

- (92) a.a.O., S. 1233–1236.
- (93) W. Muhl und K. Krause (hrsg.), *E. von Seydlitzsche Geographie für sächsische höhere Lehranstalten*, 4. Heft, 2. Aufl., Leipzig: Ferdinand Hirt & Sohn, 1936.
- (94) a.a.O., S. 91.
- (95) Walther Jantzen (hrsg.), *E. von Seydlitzsche Erdkunde für höhere Schulen*, 7. Teil: Die Großmächte der Erde, Breslau: Ferdinand Hirt, 1939, S. 9.
- (96) a.a.O., S. 94.
- (97) Ebenda.
- (98) a.a.O., 写真番号25。
- (99) a.a.O., S. 94–95.
- (100) a.a.O., S. 101–102.
- (101) a.a.O., S. 102.
- (102) a.a.O., S. 102–103.
- (103) a.a.O., S. 103.